

# 在日ドイツ兵捕虜のサッカー交流とその教育遺産

岸本 肇

Football Exchanges of German Prisoners of War in Japan and Their Educational Heritage  
Hajime Kishimoto

## 要約

第一次世界大戦中、日本に囚われていたドイツ兵捕虜のスポーツ活動の中でも、特にサッカー交流を取り上げ、その事実・背景と教育遺産について論じた。その内容は、おおむね、下記のごとくである。

1. 似島、青野原および名古屋の捕虜収容所にいたドイツ兵のサッカー交流が、史料により確認されている。
2. 交流相手は、主として、中学校、師範学校・高等師範学校であった。
3. サッカー試合を含む文化・スポーツ交流は、彼らの解放が近くなった1919年に集中している。
4. ドイツ兵捕虜収容所があった自治体における、コンサート、スポーツ行事、展覧会の催行により彼らの諸活動を再現するとりくみ、および学校でドイツ兵捕虜の足跡を題材にした教材づくりや授業をする実践は、地域教育や平和教育、国際交流教育の観点から評価できる。

## キーワード

第一次世界大戦、俘虜、ドイツ兵捕虜、スポーツ

## 1. はじめに

第二次世界大戦では、枢軸国側の同盟国として日本とドイツは、連合国側と戦った。しかし日本とドイツは、一貫して友好国同士というわけではない。第一次世界大戦ではお互いに敵対した。ヨーロッパで戦端を切られた第一次世界大戦の余波は、その緒戦段階で早くも東アジアに及ぶ。日英同盟の盟約により、日本は、ドイツの東洋における拠点であった中国・山東半島の青島（チンタオ）の要塞を攻めた。5,000人のドイツ守備隊は、日本軍5万1,700人、イギリス軍1,390人、総勢約5万3,000人の日英連合軍に対し、名誉の立つところまで戦い<sup>(1)</sup>、降伏した。これが、いわゆる日独戦争の顛末である。

その結果、日本はドイツ兵捕虜を抱え込むことになる。おおむね、1914年11月から1920年3月まで、約5年半の長きにわたる。ほぼ、第一次世界大戦の全期間に相当する。当初、寺院等を利用した12収容所があてがわれたが、それらは、戦争の長期化に伴いバラックの兵舎棟に整理・統合され、最終的には、久留米俘虜収容所（福岡県）、似島俘虜収容所（広

島県）、板東俘虜収容所（徳島県）、青野原俘虜収容所（兵庫県）、名古屋俘虜収容所（愛知県）、習志野俘虜収容所（千葉県）の6収容所に整理・統合された。

その中でも、特に、現在の鳴門市域に含まれる板東俘虜収容所では、所長・松江豊寿陸軍中佐（後に大佐に昇任）が、「武士の情け」でドイツ兵捕虜を遇したとされ、有名である。彼らは、文化・スポーツ活動に多くの自由を許され、収容所周辺の人々との交流もできた。その「美談」は直木賞を受賞した小説の筋書きとなり<sup>(2)</sup>、そのドイツ語訳も出版されている<sup>(3)</sup>。2006年6月には、松平健、ブルーノ・ガンツ（Ganz, B）主演の『バルトの楽園（がくえん）』として映画化もされている。

第一次世界大戦当時の日本は、戦争捕虜の虐待を禁じた国際法・ハーグ陸戦条約（1899年）を遵守する立場であり、ドイツ兵捕虜に強制労働を課さなかった。ドイツ兵捕虜の収容所生活は、俘虜情報局をして「實ニ彼等俘虜ノ運動癖ト讀書癖ハ國民性長所トモ稱スベキ美点ナランカ、我國人ノ採テ以テ學ブベキコトタルベシ」と感嘆させていた<sup>(4)</sup>。

しかし実際には、どこの収容所でもドイツ兵捕虜を営倉送りにするトラブルは発生しており、ほとんどの収容所で逃亡事件が起こっている。中には、収容所長がドイツ兵将校を殴打した事件もあり、これは後に国際問題にまで発展している<sup>(5)</sup>。したがって、小説化、映画化された板東俘虜収容所における「ヒューマンイズム」「寛容の精神」のイメージだけで、日本各地にあったドイツ兵捕虜収容所全体を見ることはできない。そもそも板東俘虜収容所の開設期間は、収容所を管理する日本側とドイツ兵捕虜の気心が理解し合えるようになった彼らの在日後半期の2年9か月である。

そのことを断った上で、本稿では、ドイツ兵捕虜の諸活動の中でも、特にスポーツ活動に着目する。課役がない彼らの生活は、無聊との戦いであった。その生活の中で、スポーツが大きな比重を占めていたことは、板東俘虜収容所、松山俘虜収容所、久留米俘虜収容所について、山田が先駆的に明らかにしている<sup>(6)</sup>。姫路俘虜収容所と青野原俘虜収容所<sup>(7)</sup>、名古屋俘虜収容所<sup>(8)</sup>については、岸本が明らかにしている。

本研究は、そのようなドイツ兵捕虜のスポーツ活動の中でも、史料により、学校ないし地域のサッカーチームとのサッカー交流が確認できる3つの事例を取り上げ、①ドイツ兵捕虜のスポーツ活動の背景、②ドイツ兵捕虜が、いつ、どこで、だれとサッカー試合を行い、交流を深めたのか、③日独サッカー交流が伝えたもの、④現在の学校・地域で蘇るドイツ兵捕虜の足跡とその教育素材としての価値、について論じる。

なお、この論述に当たり、頻繁に使用する用語2点について、説明しておきたい。

俘虜と捕虜は同義であるが、現在、前者は死語に等しい。したがって本文中では、固有名詞である「～俘虜収容所」以外は、捕虜で統一する。

スポーツの定義は簡単ではない。サッカー、テニスなどの球技、レスリング、ボクシングなどの格闘技、水泳などは議論の余地なくスポーツである。しかし、体操（Turnen）や散歩・遠足などを、スポーツ概念に含めてよいかどうかは議論のあるところである。そこにこだわると、本文が展開できなくなるので、この研究では、体操、散歩・遠足なども含む運動や身体レクリエーション活動の総称としてスポーツを使用する。

## 2. ドイツ兵捕虜のスポーツ活動の背景と内容

日独戦争で捕虜となったドイツ兵は、日本に連行されて以後、退屈しのぎに急にスポーツを始めたのではない。

日本へ来る前に駐留していた青島には、1900年に体操クラブ（Turnverein）が創設されていた<sup>(9)</sup>。そのようなクラブ組織のメンバーでなくても、体操は軍人の訓練内容であった。日露戦争の際、旅順攻略の過程で、日本の決死隊は組立て体操の「人間ピラミッド」をつくり、敵の7mの堡塁を越えようとしたことがあったようである<sup>(10)</sup>。久留米俘虜収容所に拘置されたドイツ兵捕虜が、スポーツ週間（Sportwoche）のプログラムに「ショー体操」（Schauturnen）を入れたところ、収容所側は、それを「戦技」とみなし、その実施を認めなかった<sup>(11)</sup>。その事実からもわかるように、当時、軍隊訓練と体操は、不可分の関係であった。

サッカーも青島駐留時代からやられており、練兵場でイギリス海軍とゲームをした記録もある<sup>(12)</sup>。日本で解放され、帰国する途中に、スマトラでもサッカーをしている<sup>(13)</sup>。したがって、その中間における5年猶予に及ぶ日本の捕虜生活中にサッカーをしたくなくても何の不思議もない。日本に着いた途端、収容所が設置されていた寺院の庭園でサッカーをやり、屋根や壁を損壊するので、日本側がボールを取

り上げたというドイツ兵捕虜の記述が日記に残されているほど<sup>(14)</sup>、彼らはサッカーをよくした。当時、部隊が前線を離れているとき、平時のレクリエーションで埋めるように配慮するのはふつうであった<sup>(15)</sup>。在日ドイツ兵捕虜収容所のみならず、第一次世界大戦中、ヨーロッパやシベリアに点々とあったドイツ兵捕虜収容所のどこでもスポーツが盛んだったことは、オーストリアで出版された第一次世界大戦の記録文書からもわかる<sup>(16)</sup>。

ドイツ兵捕虜のスポーツ活動の背景には、ドイツ人の「スポーツ教養」の高さが示されていると同時に、もともと身体を鍛え、「戦技」を身につけるのが軍人の任務であったという側面、ならびに虜囚生活における健康・体力と楽しみをつくるレクリエーションとしての側面の2つがあったことを、見落としてはいけないのである。

### 3. 判明している3つのサッカー交流

#### (1) 似島俘虜収容所

2006年1月22日、「日本におけるドイツ年2005/2006」「FIFA ワールドカップ・ドイツ大会」に時宜を得た日独交流のドキュメンタリー番組「ドイツからの贈りもの—国境を越えた奇跡の物語」がフジテレビ系で放映された。広島湾に浮かぶ小さな島、似島に設置されていた戦争捕虜の収容所に抑留されていたドイツ兵捕虜と地元中学校生・師範学校生とのサッカー交流にまつわる物語である。そのことについては、その後、瀬戸<sup>(17)</sup>により紹介されている。毎日新聞<sup>(18)</sup>でも、紹介されている。

それらをもとにすると、似島俘虜収容所にいたドイツ兵捕虜のサッカー交流の様子は、以下のように要約できる。

- ・開催日・場所： 1919年1月26日、於）広島高等師範グラウンド
- ・対戦相手： 広島高等師範学校（高師）、広島県

師範学校（県師）、広島高等師範学校附属中学校、広島県立第一中学校の合同チーム

- ・試合結果： 高師0対5、県師0対6で完敗（県師のサッカー部『部史』には、この記録のみがあり。合同チームの対戦結果は不詳。）
- ・試合後の交流： 高師主将・田中敬孝は、その後、毎週のように島に渡り、技術指導を受ける。
- ・逸話： そのときの選手のひとり、クライバー（Klaiber, H.）は、帰国後、ヴァンバイル（テュービンゲン郊外）でサッカー・クラブを結成。そのクラブは現在も活動中であり、そこから浦和レッズでプレーし、監督もした元ドイツ代表選手のブーフヴァルト（Buchwald, G. U.）が育った。

#### (2) 青野原俘虜収容所

青野原俘虜収容所ドイツ兵とのサッカー交流に関しては、筆者<sup>(19)</sup>がすでに報告している。最初の交流は、ドイツ兵捕虜の一团が遠足の途中で、兵庫県立小野中学校の校門前で休憩しているときに「勃発」した下記の「遭遇戦」である。

- ・開催日・場所： 1919年5月22日 於）兵庫県立小野中学校グラウンド
- ・対戦相手： 兵庫県立小野中学校
- ・逸話： 試合後、ドイツ兵は鉄棒演技を実演し、中学校側は柔道と剣道の試合や型を見せて応じた。そのことが機縁となり、その後、中学校側から青野原収容所へサッカーを習いに行く交流があり、下記の試合開催の運びとなる。図1は、そのときと推定されるサッカー風景である。
- ・開催日・場所： 1919年7月13日 於）青野原俘虜収容所グラウンド
- ・対戦相手： 兵庫県立小野中学校、兵庫県姫路師範学校
- ・試合結果： 0対6や0対8で、日本側の完敗
- ・逸話： そのときの交流記念にグラウンド整地用のローラーが、ドイツ兵捕虜チームから小野中



学校に贈呈された。ただし、そのローラーは現存しない。



図1 青野原俘虜収容所グラウンドにおけるサッカー試合（姫路俘虜収容所・青野原俘虜収容所に抑留されていた Assing, M. の遺品、Schmidt, H-J. 所蔵）

### (3) 名古屋俘虜収容所

これも瀬戸<sup>(20)</sup>が、試合経過も含めて、すでに紹介している。中日新聞<sup>(21)</sup>でも、紹介されているので、詳細はそれらに譲る。

- ・開催日・場所： 1919年10月5日 於）明倫中学校グラウンド
  - ・試合の形式： 第八高等学校、明倫中学校、および明倫中OBよりなる「名古屋蹴球団」のメンバーとドイツ兵捕虜による日独混合チーム、白軍対黒軍の60分ゲーム。
- なお、出場した日独双方の選手は、当時の新聞<sup>(22)</sup>

で特定できる（図2）。

- ・特徴： 日独の対抗戦ではなく日独混合2チームが戦っており、高等学校生も加わっていた。

### (4) その他のサッカー交流

前節で述べたような組織的な交流試合ではないが、他にも日独サッカー交流の事実が記録に残されている。静岡俘虜収容所のドイツ兵捕虜は、静岡県静岡師範学校のグラウンドへ来てサッカーをすることがあったようで<sup>(23)</sup>、同師範学校の蹴球部創設メンバーは、ドイツ兵からサッカーを習ったりもしていた<sup>(24)</sup>。

そのように、在日ドイツ兵捕虜にとって、サッカーは人気スポーツであった。今後、さらに第一次世界大戦の「落とし子」である日独サッカー交流の事実とそれに伴う逸話が明らかにされる可能性がある。

## 4. 日独サッカー交流が伝えたもの

### (1) 平和の所産としての文化・スポーツ

似島、青野原、名古屋の3収容所のドイツ兵捕虜が日本人とサッカー試合をしたのは、いずれも1919年である。その前年1918年11月11日、第一次世界大戦、休戦後の出来事である。約90年前の3つの日独サッカー交流は、当時の新聞の見出しのとおり<sup>(25)</sup>、平和が到来したからこそできたスポーツの行事である。



図2 名古屋俘虜収容所ドイツ兵捕虜と名古屋蹴球団とのサッカー試合を報道する新聞記事（「新愛知」1919年10月6日）

このことは、ドイツ兵捕虜の製作品（農工業の機械・器具、造形品などの芸術作品）、楽器などの持ち物、ケーキ・クッキーなど菓子類などを展示・販売した展覧会の催行が、いずれも休戦後であることも符合する。ちなみに、似島ドイツ俘虜技術工芸品展覧会（1919年3月4～12日）、青野原俘虜収容所ドイツ・オーストリア・ハンガリー兵製作品展覧会（1918年12月13～20日）、名古屋俘虜製作品展覧会（1919年6月22～30日）の開催であった。

音楽に目を転じる。広島高等師範学校主催による「俘虜音楽会」は、1919年5月20日に開催されている。板東俘虜収容所は、その人道的な捕虜管理とともに、ベートーヴェンの交響曲「第九」が本邦で初公開された地としても名高いが、その初演日は1919年6月1日であった。久留米俘虜収容所は、逆にドイツ兵捕虜との軋轢の多さで「悪名」高いが、それでも彼らの滞在末期にはコンサートで地域との交流がはかられている。福岡県立久留米高等女学校においてドイツ兵捕虜により「第九」が演奏されたのは、1919年12月3日であった。

以上のように、ドイツ兵捕虜と学校・地域との文化・スポーツ交流は、事実上の終戦である休戦条約締結となり、日独が敵対する必要がなくなった時期になったからこそ、実現できたのである。別言すれば、ドイツ兵捕虜と地元との交流諸行事は、翌年早々には帰国する彼らとの「別れの行事」でもあったのである。

## (2) 本場のサッカー技術の伝播

サッカー試合の描写をしてみよう。

似島俘虜収容所のサッカーチームと試合をした広島高師サッカー部主将故田中敬孝氏の次男清司氏は、「日本人はボールを大きく蹴るだけだが、彼らは『ヒールキック』という、見たこともない技術でパスをつないだ」<sup>(18)</sup>と、父より聞いているという。

名古屋蹴球団とドイツ兵捕虜との交歓試合につい

て、元愛知県サッカー協会副会長・鈴木丈夫氏は、「ドイツ人は無駄な動きが少なく、声も出さずにハンドシグナルで意思を伝えあっていたようだ」<sup>(21)</sup>と、そのときを知る人からの伝聞を語っている。

ドイツ兵捕虜のパスがつながっていくサッカーに驚いたのが、当時の日本のサッカー界のレベルだった。「流石に彼（ママ）は倔強なる獨逸兵なれば我が敵手としては餘りに懸隔ありき」<sup>(26)</sup>だった。

青野原俘虜収容所に囚われていたひとりのドイツ兵捕虜は、日記に次のように書き残している。<sup>(27)</sup>

Dreimal haben wir gegen die Mannschaft eines Lehrerseminars aus Himeji in Aono Fußball gespielt. Nach 6:0 für uns unsere Gegner Revenche. …Arme Japaner, ich werde ihre enttauschten Mienen nie vergessen: wir hatten 8:0 gewonnen. Mein Posten war Mittelläufer.

われわれは、3回ばかり姫路から来た師範学校のチームと青野原でサッカーの試合をした。6対0のあと、われわれの相手は復讐戦を挑んできた。かわいそうな日本人、私は彼らのしょげた表情を決して忘れない。われわれは8対0で勝ってしまったのだ。私のポジションは、ハーフバックだった。（筆者訳）

ドイツ兵捕虜収容所があった地域においては、将来の「指導層」である中学校・高等学校生や、教師になる師範学校・高等師範学校生が、屈辱的な大敗を代償として、ヨーロッパ直伝のサッカーの技術と戦術を学んだのであった。

## 5. 結論にかえて—学校・地域で蘇るドイツ兵捕虜と日独境の連携

旧愛知県立第一中学校の後身である愛知県立旭丘高等学校の百年史には、同校とドイツ兵捕虜との関

わりについて頁が割かれている。旭丘高校の敷地は愛知一中から引き継いでいるが、そこはドイツ兵捕虜収容所の跡地であり、かつてドイツ兵捕虜がサッカーなどをしていた場所であると記述されている<sup>(28)</sup>。そればかりか、2003年4月、旭丘高校通用門脇にドイツ兵捕虜の滞在を記念する「日独友好の碑」が建立されている。

旧兵庫県立小野中学校の後身である兵庫県立小野高等学校の百年史では、2.2. で述べたドイツ兵捕虜とのサッカー交流のことが記されている<sup>(29)</sup>。

2007年10月、福岡県立明善高等学校創立記念日講演会は、前身の久留米高女におけるドイツ兵捕虜のコンサートで第一バイオリン奏者であったエルンスト・クルーゲ (Kluge, E) の子息クリスチャン・クルーゲ (Kluge, C) を迎えて開催されている。

現在、前身校がドイツ兵捕虜と縁のあった高校の学校史や行事において、約90年前の日独文化・スポーツ交流が蘇っているのは、生徒の教育としても意義深いと考える。

兵庫県小野市では、神戸大学交響楽団による青野原俘虜収容所再現コンサートが、2006年10月と2008年8月に催行されている。鳴門市ドイツ館では、2008年2月、徳島県立鳴門高等学校吹奏楽部による再現コンサート“Musik im Lager”（収容所における音楽）が開催されている<sup>(30)</sup>。

スポーツでは、鳴門市民が、ドイツ兵捕虜がやっていたシュラークバル (Schlagball) という野球に似たスポーツを試す行事もあった<sup>(31)</sup>。学校だけでなく、ドイツ兵捕虜ゆかりの地域でも、ドイツ兵捕虜の活動が蘇っているのである。

ドイツ兵捕虜と学校・地域との交流の事実は、社会科や地域学習の生きた教育素材となる。習志野市では、中学校・社会科の「第一次世界大戦とアジア・日本」の単元で、ドイツ兵捕虜のことが扱われている<sup>(32)</sup>。小野市では、そのことと地域学習の素材を

セットにした展覧会の図録<sup>(33)</sup>が作成されている。そのようなとりくみが、全国に広がるように期待する。



図3 俘虜展覧会（於 ウィーン）のポスター

2008年9～10月、ウィーンのオーストリア国立文書館で“Nach der Heimat möchte ich wieder: Die österreichisch-ungarischen Kriegsgefangenen in Japan”（私は祖国に帰りたい—日本にいたオーストリア・ハンガリー兵捕虜）の展覧会とコンサートが、小野市、神戸大学、オーストリア国立文書館の共催で開かれた。図3の写真は、それを宣伝するドイツ語ポスターである。コンサートは、ウィーンの軍事博物館でも催行された。青野原俘虜収容所には、ドイツ兵捕虜とともに、オーストリア・ハンガリー兵捕虜も抑留されていた機縁からである。第一次世界大戦勃発の地、そして第一次世界大戦でも第二次世界大戦でも、敗戦国側に立たされる憂き目にあったオーストリアにおけるその企画は、日独史の交流史研究の立場からも画期的である。

現在の日本では、英語をとおして外国を見る傾向



が非常に強い。しかし、約90年前の日本に、ドイツ語圏のドイツ兵、オーストリア兵、そしてハンガリー兵がいたこと、しかも彼らが中国・青島から来た第一次世界大戦の戦争捕虜であることは、地域教育や平和教育の立場から、また身近なところから世界に目を開く国際交流教育の立場から、もっと注目されてよいと考える。

(本研究は、平成19-20年度・科学研究費補助金(基盤研究(C))「国際インターネット新出史料によるドイツ兵俘虜のスポーツ活動の全体構造の解明」(課題番号:19500533)の一部である)

### 注および文献

- (1) 大津留 厚 (2006) 青島のエリザベート号—第一次世界大戦における「カイゼリン・エリザベート」号と日本とオーストリア・ハンガリー関係, 学術シンポジウム「コロニアル都市・青島の形成とその歴史的位相」(神戸大学文学部・神戸大学大学院文化科学研究科主催) 報告要旨: 32-36.
- (2) 中村彰彦 (1997) 二つの山河, 文藝春秋.
- (3) Nakamura, A (Aus dem Japanischen von Herbert, W) (2003) Widergespiegelte Heimatwelten: Berge und Flüsse, Das Deutsche Haus Naruto.
- (4) 陸軍省, 大正三年乃至九年戦役俘虜に関する書類, 「俘虜収容所情況ノ件報告」, 防衛庁防衛研究所図書館所蔵.
- (5) 久留米市教育委員会教育文化部文化財保護課 (2003) ドイツ軍兵士と久留米—久留米俘虜収容所Ⅱ(久留米市文化財調査報告書第195集), 久留米市教育委員会, pp.6-13.
- (6) 山田理恵 (1998) 俘虜生活とスポーツ—第一次大戦下の日本におけるドイツ兵俘虜の場合, 不昧堂出版.
- (7) 岸本 肇 (2005) 青野原俘虜収容所捕虜兵のスポーツ活動, 体育学研究 50(3): 185-195.
- (8) 岸本 肇 (2008) 名古屋俘虜収容所ドイツ兵捕虜のスポーツ活動とその特徴, 日本体育学会第59回大会予稿集: 72.
- (9) Jahresbericht des Turnvereins Tsingtau 1901.
- (10) 古川 薫 (2008) 斜陽に立つ, 毎日新聞社, p.363.
- (11) Turnen und Sport im Kriegsgefangenenlager KURUME 1915-1919, S.10.
- (12) 瀬戸武彦 (2006) 青島から来た兵士たち—第一次大戦とドイツ兵俘虜の実像, 同学社, p.55, p.108.
- (13) Kersten, H., Tagebuch, Maschinenschrift. S.35.
- (14) Verfasser unbekannt, Tagebuch, Maschinenschrift. S.45.
- (15) ウィンター, J. M. (深田甫訳) (1990) 第一次世界大戦(下) 兵士と市民の戦争(20世紀の歴史14), 平凡社, p.38.
- (16) Weiland, H. und Leopold, K. (1931) In Feindeshand: Die Gefangenschaft im Weltkriege in Einzeldarstellungen, Bundesvereinigung der ehemaligen österreichischen Kriegsgefangenen 2Bd, S.183.
- (17) 瀬戸武彦 (2006) 青島から来た兵士たち—第一次大戦とドイツ兵俘虜の実像, pp.108-111.
- (18) 実力差歴然 大正の“国際試合”, 毎日新聞 2006年5月2日.
- (19) 岸本 肇 (2005) 青野原俘虜収容所捕虜兵のスポーツ活動, 体育学研究 50(3): 285-294.
- (20) 瀬戸武彦 (2006) 青島から来た兵士たち—第一次大戦とドイツ兵俘虜の実像, pp.111-114.

- (21) 独兵捕虜とサッカー交流 名古屋蹴球団 本場の技術学ぶ, 中日新聞 2006年6月9日夕刊.
- (22) 日獨混合蹴球戦 白軍二、黒軍一, 新愛知 1919年10月6日.
- (23) 原口和久(1999) 静岡県の20世紀, 羽衣出版, p.32.
- (24) 静岡新聞社(2006) 静岡サッカー事始め, 静岡新書, p.50.
- (25) 平和克服気分というものか, 大阪朝日新聞 1919年7月13日.
- (26) 兵庫県立小野中学校々友會(1920) 校友會々報 13:59.
- (27) Kersten, H., Tagebuch, Maschinenschrift. S.22.
- (28) 鯨光百年史編集委員会(1977) 鯨光百年史, 愛知一中(旭丘高校)創立百年祭実行委員会, p.316.
- (29) 百周年記念史誌編集委員会(2002), 百周年記念史誌 兵庫県立小野高等学校, 創立100周年記念事業実行委員会, pp.67-68.
- (30) 独捕虜演奏の曲披露 ドイツ館で鳴門高生「第九」など250人魅了, 徳島新聞 2008年2月25日には、筆者の参加談が掲載されている。
- (31) 雑記帳, 毎日新聞 2006年9月24日.
- (32) 千葉県教育委員会(2004) 確かな学力の向上にむけて 第2集(平成15年度指導資料 第148集)、pp.34-36.
- (33) 小野市好古館(2005) 青野原俘虜収容所の世界—小野市河合地区の近世・近代から現代(小野市好古館特別展図録 29).